

## 研究テーマ

BPSDに対するケアバンドル実践報告  
～回復期リハビリテーション病棟における介入効果の検討～

## 病 院 名

医療法人社団健育会 竹川病院

## 演 者

なりえだのぞみ  
○成枝望(看護師) 山本貴子(看護師) 大森正雄(看護師)  
今木恵子(看護師)

## 概 要

### 【緒言】

回復期リハビリテーション病棟(以下回リハ病棟)では、認知症高齢者は不安や環境変化によりBPSDが発症しやすく、リハビリ参加やADL拡大を妨げる事例が多い。先行研究では疼痛・不安・便秘など複数要因が背景にあることが示され、症状別介入の有効性も報告されている。そこで本研究では、効果的とされる6項目のケアをバンドル化し、BPSD予防効果を検証した。

### 【目的】

入院時にBPSD-NQ57で背景要因を評価し、BPSDの効果的なケア介入6項目からケアバンドルを用いて介入することで、BPSD発症を予防・軽減できるかを検証する。これにより認知症高齢者のリハビリ参加を促し、ADL拡大と在宅復帰を支援する。

### 【方法】

本研究はA病院回リハ3病棟の新規入院患者のうち、認知症診断のある患者を対象とした介入調査研究である。倫理委員会の承認(20250513-003)を得た。非介入群を202X年、介入群を202Y年のそれぞれ6月から8月の対象患者とした。介入群の対象患者に対して入院時よりBPSD気づき質問票57項目版(以下BPSD-NQ57)を評価し、宇佐美らが抽出した効果的なケア介入6項目から必要なケアを複数選択し実践した。評価は、入院日、7日目、一か月ごと、退院時に実施した。基本属性、認知機能、BPSD - NQ57を単純集計と $\chi$ 二乗検定を用いて分析した。

### 【結果】

調査期間中に入院した146名のうち認知症診断のある18名を対象に、平均3.7項目のケアバンドルが実施された。最も多かった介入は見当識支援であり、次いで睡眠・生活リズム、排泄管理であった。BPSD-NQ57の推移では、介入群は非介入群と比較して不安・興奮・幻覚・無関心・アパシーの改善が大きく、不安は10.1点から3.9点、興奮は5.7点まで低下した。一方、脱抑制は増悪傾向を示した。退院した7名のFIMは46点から68点へと22点上昇した。

### 【考察】

介入群は拘束歴や病型の偏りからケア困難な対象であったにもかかわらず、ケアバンドルの実施により不安、興奮、幻覚、無関心・アパシーなど複数の症状が改善し、BPSD発現の抑制や遅延に対する有効性が示唆された。一方、脱抑制や常同行動の増悪は、回リハ病棟特有の刺激の多さに起因した可能性が考えられる。鈴木らは心理的ニードが満たされることがBPSDに繋がることを指摘しており、看護師が日々のアセスメントを通じて、患者のニーズに応じた柔軟で個別性の高いケアを選択することで、ケアバンドルの効果が高まりBPSDの予防効果の向上につながると考えられる。

### 【結論】

ケアバンドルはBPSDの進行抑制や発現遅延に寄与する可能性が示唆された。また、個別性に応じて柔軟にケアを組み合わせることで、BPSD予防効果を高め、リハビリ参加を促しADL拡大につながることが示唆された。